

課題4

早生樹（ユリノキ）の更新特性等と需給実態について

令和5年度～令和9年度

戦後造成された人工林は主伐、再造林の時期を迎えており、森林の適正な管理と森林資源の持続的な利用を一層推進する中で、伐採から再造林・保育に至る収支のプラス転換を可能とする新しい林業を目指す取組が進められています。

当センターでは平成28年度から令和2年度までの5年間で「早生樹を使用した施業モデルの構築」と題し、従来の造林樹種と比較して成長が優れ、短期間で収穫できる早生樹の成長特性等について実証しました。

結果、東北地方においてもユリノキが良好な成長を示すことが確認されました。またユリノキについては、萌芽更新力が旺盛で伐採後の天然更新が容易であることも確認されました。

一方、造林樹種としての実用化に向けては、ユリノキの種子の飛散距離は最大約90mとなっており、周辺森林への分布拡大が懸念されるなど、実生による更新特性について更なる検証が必要となっています。

また、ユリノキは欧米では家具材・内装材・造作材として市場が成立しているものの、日本における造林樹種としての実用化に向けては、需要の創出・拡大が前提となるため、取引価格や需給実態等を調査することで、東北地方における木材としての利用の可能性を調査する必要があります。

ユリノキの萌芽枝の成長並びに実生更新による分布域の拡大を検証するとともに、植栽適地や有効な育林技術の検証及び造林樹種としての利用の可能性を評価し、東北地方におけるユリノキの施業案をとりまとめ、その普及を目指します。



米代東部署 ユリノキ試験地（4年生時）



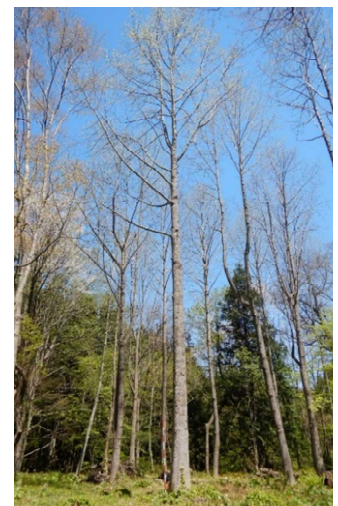
三陸北部署 ユリノキ試験地（5年生時）



岩手大学滝沢演習林 萌芽枝



ユリノキ丸太



青森署ユリノキ 33年生